

【プレスリリース】

国文学研究資料館がかごしま近代文学館所蔵
「梅崎春生特別資料」のデジタル画像公開
「島尾敏雄特別資料」の追加公開も
戦後小説の創作方法を照らし出す資料群

2024/12/25

国文学研究資料館（以下「国文研」）は、かごしま近代文学館（鹿児島県鹿児島市）が所蔵する梅崎春生自筆資料 3 点（計 366 枚）の高精細デジタル化に取り組み、同館所蔵の島尾敏雄自筆資料の継続分 53 点（1,042 枚）と合わせて、2024 年 12 月 25 日に国文研の「国書データベース」にて公開しました。「第一次戦後派」の代表的作家である梅崎春生の自筆資料コレクションは、島尾敏雄自筆資料とともに戦争と文学の関係を鮮明に浮かびあがらせ、かつ第二次世界大戦後の日本社会をいかに描くかという、文学史・社会史の大きな課題について知るための重要資料群です。

梅崎春生（1915～1965）は福岡県に生まれました。熊本の第五高等学校、東京帝国大学文学部国文科を卒業後に応召、鹿児島・桜島にて終戦を迎えます。戦争体験を描いた『桜島』や兄・梅崎光生の応召経験を材とした『日の果て』などにより「第一次戦後派」として脚光を浴び、のちに『ボロ家の春秋』『幻化』『狂い凧』など、戦後社会にひそむゆがみや幻想を描く作品を発表しました。どこかユーモラスな、しかしそれゆえに社会通念の奥にあるものを深くえぐりだす梅崎の文体は、今日なお多くの作家・読者に愛されています。

梅崎春生の原稿は、1998 年のかごしま近代文学館開館の際に収集した資料で、梅崎家から寄贈された自筆資料や遺品などとともに「梅崎春生特別資料」として保管されています。

国文学研究資料館は、かごしま近代文学館が所蔵する「島尾敏雄特別資料」のうち戦争小説や代表作『死の棘』の資料を 2022 年度に画像公開しており、今回、梅崎春生資料とともに、あらたに島尾敏雄晩年の大作『魚雷艇学生』草稿を含めた資料群をあわせて公開しました。ともに戦争を経験し、戦後の日常が変化してゆくさまを描いた両作家の原稿は、風化しつつある戦争と戦後の記憶をあらためて呼び起こすための貴重な資料でもあります。2022 年より同館と国文学研究資料館との協力・連携のもと進めたデジタル化の取り組みにより、梅崎の自筆資料のインターネットを通じた検索・閲覧が「いつでも、どこでも、どなたでも、そして無料で」可能になりました。

■ デジタル公開の意義

高精細画像によって公開される草稿には、梅崎春生と島尾敏雄が自らのテーマを掘り下げていった過程を読むことができます。

今回公開される梅崎の自筆資料は、戦後発表された戦争小説『独楽』、長篇小説『ボロ家の春秋』と『幻化』の3点です。『独楽』はフィリピンを舞台とする戦争小説の傑作『日の果て』（1947年9月「思索」掲載）のプロトタイプにあたる小説で、『日の果て』では主人公が三人称の「宇治中尉」であるのに対し『独楽』では一人称の「私」であるなど、後に大きく書き換えて発表された作品です。本文は雑誌「文学的立場」1970年9月号にて発表されていますが、今回の画像公開によって、作品の原構想をうかがわせる「書きなおし」やメモを含めて確認できるようになりました。『ボロ家の春秋』（1954年8月「新潮」掲載）は戦後に奇妙な同居生活をはじめた二人組の物語で、原稿には主人公たちと交流する台湾人の名前をはじめ、同時代の世相にかかわる箇所を慎重に訂正した跡があります。『幻化』（1965年6、8月「新潮」）は梅崎の死の直前に書かれた作品で、戦争の記憶とともに鹿児島・熊本をさまよう、精神を病んだ男の姿が描かれます。

「島尾敏雄特別資料」の今回追加公開された草稿は、晩年に自らの特攻隊体験を描いた『魚雷艇学生』（1985年刊）と、崩壊する家族の物語である『死の棘』の関連草稿群です。島尾敏雄も戦争と戦後の社会のなかで、個人がいかにかのびるかという主題を書きつづけた作家であり、二人の作家の代表作を誰もが自筆草稿の形で閲覧できるようになったことで、戦後文学の研究はもちろん、日本史や社会学など、さまざまな分野における探究の可能性が広がると考えます。

なお今回の画像公開は、国文研の事業「近代文献草稿・原稿類に関する所在目録調査と研究」の一環であり、すでに公開している「島尾敏雄特別資料」（かごしま近代文学館蔵）・「森田思軒自筆原稿資料」（笠岡市教育委員会管理）・「中原中也自筆資料」（中原中也記念館蔵）・「武者小路実篤自筆資料」（武者小路実篤記念館）・「上野英信自筆資料」（福岡市立総合図書館蔵）とともに見ることで、近代文学における「自筆資料」の具体的な姿を知ることができます。

〈本件に関するお問い合わせ〉

・国文学研究資料館 管理部学術情報課 社会連携係

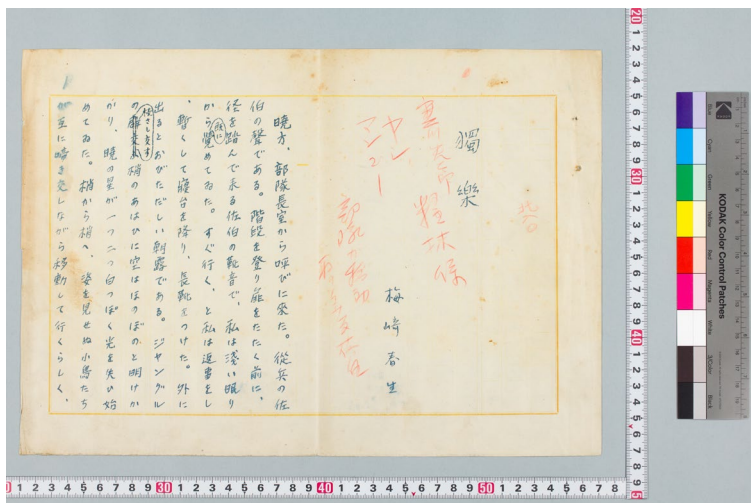
E-mail: jigyou@nijl.ac.jp / TEL: 050-5533-2910 / FAX: 042-526-8604

・かごしま近代文学館

E-mail: kinmeru@k-kb.or.jp / TEL: 099-226-7771 / FAX: 099-227-2653

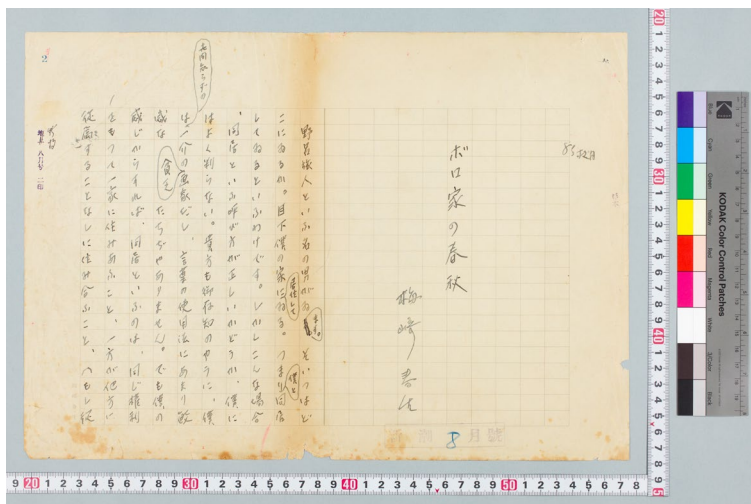
■ 「国書データベース」で公開される梅崎春生・島尾敏雄自筆資料の例

◆ 梅崎春生『独楽』（『日の果て』原型）草稿



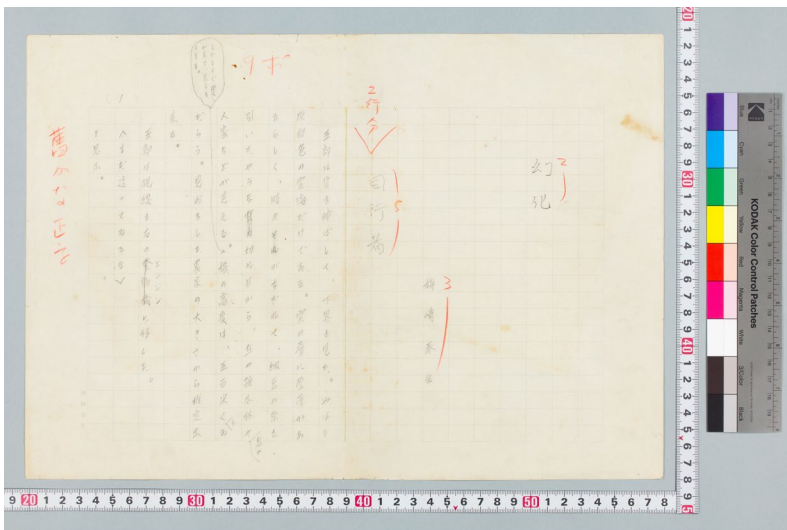
※戦争小説『日の果て』（1947年9月「思索」掲載）のプロトタイプとなった作品。一人称で書かれる（『日の果て』は三人称）。冒頭には「寒川光太郎」「糧秣係」など、作品の原構想にかかわるメモが並ぶ。

◆ 梅崎春生『ボロ家の春秋』草稿



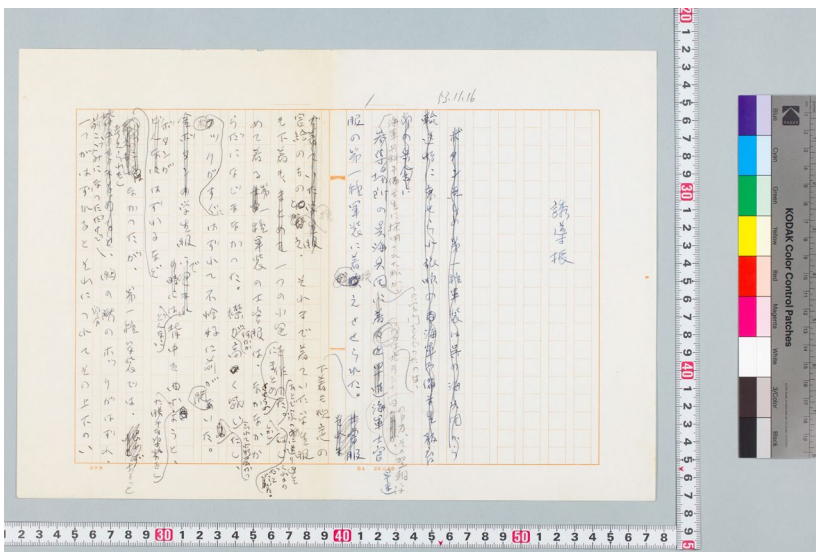
※1954年8月「新潮」掲載。奇妙な同居生活をはじめた二人組の物語のあちこちに、戦後の国際情勢を思わせる寓話的要素をちりばめる作品。世相に関わる語彙を慎重に選んだあとがある。作品がはじめ雑誌「新潮」ではなく、雑誌「地上」に掲載予定だったことも伺える。

◆梅崎春生『幻化』草稿



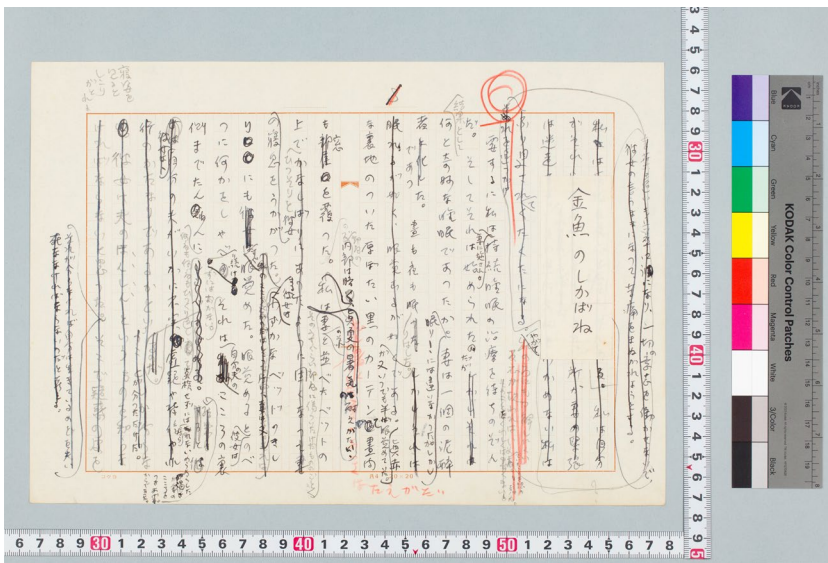
※1965年6、8月「新潮」掲載。東京の精神病院を抜け出し、戦争中に兵士として配属された鹿児島・坊津と学生時代を過ごした熊本をさまよう男の物語。死の直前に書かれた作。

◆『誘導振』（『魚雷艇学生』）草稿



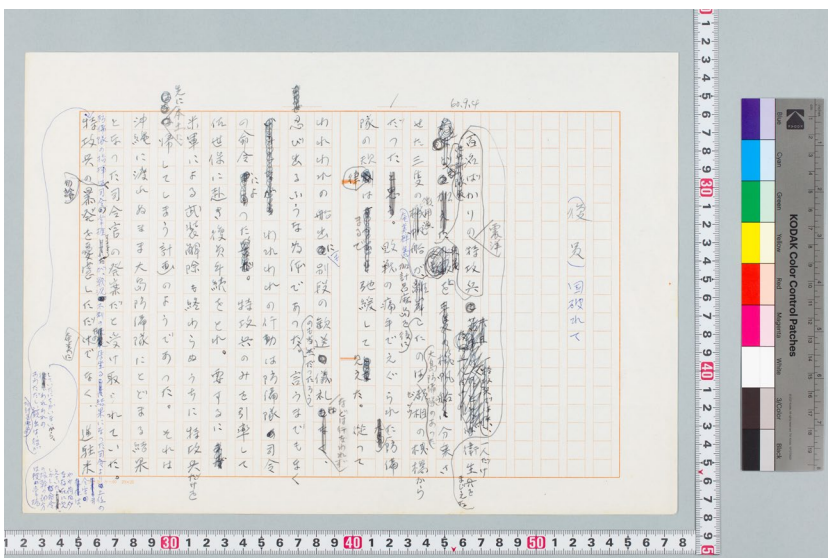
※短篇連作として書き出された『魚雷艇学生』の第一章にあたる作品。1979年1月「新潮」掲載。海軍士官学校での訓練を描く。草稿は二種類残る。

◆『金魚のしかばね』草稿



※「重い肩車」（1957年4月「文学界」掲載）の草稿群の一。妻・ミホとともに入院した精神病院での体験を小説化した作品。徹底的に推敲を加え、さらに何度も書きなおされた草稿群が残る。

◆島尾敏雄『（復員）国破れて』草稿



※1987年1月「群像」掲載。終戦直後の特攻隊基地の武装解除にいたる過程を描く。原稿最終ページに、遺族の島尾伸三氏により「（絶筆）」と記されるように、生前最後の作品となった。